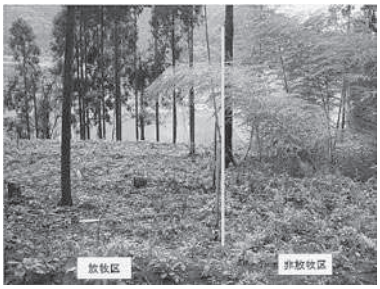
●誌上教材研究（隔月連載）　その 40

小学校教師による，小 5 社会科“森林資源”の教材研究―1 枚の写真を通して

里地里山を守る牛

作成：橋本祥夫（はしもと　よしお／京都教育大学附属京都小中学校　教諭）
寸評：山下宏文（やました　ひろぶみ／京都教育大学　教授）*



◀放牧による採食差

おまけです

◀傾斜地でタケノコを食べる和牛

写真提供：京都府（碇高原牧場）

語り：「牛が食べているのは，牧草ではなくタケノコです。この牛は，里地里山を守ってくれています。しかも，竹林を整備してくれます。それはいったいどういうことでしょう。

京都府綾部市では，全国の農村地区同様，野生動物の農作物被害に頭を悩ませていました。里山林など山林の管理が行き届かず荒廃している現状では，里山へ生息域を拡大したツキノワグマ，イノシシ，サルなどが農地や住宅地に出没し農作物や人に被害を及ぼすことが増えてきているのです。

このため，農地等の境界に沿って里山を帯状に整備し，人と野生動物を隔てる緩衝地帯（バッファゾーン）を創生し，棲（す）み分けを明確にしようとしました。

本来美しく管理された里山は，隠れる場所が少ないので動物にとって行きにくい所でした。ところが，管理不十分な里山が増えたのでクマ，イノシシなどの野生動物は，人に見つかる不安もなく農地のすぐ横まで来られるようになっているのです。農地のすぐ横まで来ていれば，簡単に農地へ入って荒らすことができます。これを防ぐために里山を整備するわけです。ところが，一度きれいに刈り払ってもすぐに草が生えて見通しが利かなくなります。

そこで牛の登場です。牛は一生懸命草を食べてくれます。するとどうでしょう。気がつけば，牛が里山を管理してくれていたとなるわけです。特に竹林では，放牧区と非放牧区との竹の生育差は歴然で，竹林の維持管理には有効であることが明らかになっています。里地里山の保全整備，農地・林地の維持管理。まさに一石二鳥ですね。」

意図（橋本）：里地里山は，過疎化が進み，農業人口が減っていく中で荒れていき，そのため野生動物の被害を受け，さらに農業をする人が減るという悪循環に陥っている。そうした中，里地里山の再生に向けて，地元の人々と行政が一体となって取組みを進めている例として，この事例を取り上げたい。ここでは，森林ボランティアや NPO 法人も積極的に活動している。それらの活動は里山・農村部の魅力を市内外に PR するとともに，都市農村交流や第二の人生の場としての里地の定住化を促進しようとしている。子どもたちには里地里山のマイナス面だけでなく，こうした，人々の前向きな努力にも気付かせていきたい。

寸評（山下）：前回に引き続き里山に目を向け，それを守る取組みを教材化してもらった。地域の里山を地域の人々が積極的に守ろうとする姿は，社会科という教科の教材としても価値あるものと思われる。

＊山下…〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1　Tel 075-644-8219（直通）